

観光地化した島に架橋は必要か否か

—沖縄県竹富町鳩間島の事例—

堀本雅章

法政大学沖縄文化研究所

沖縄県竹富町にある鳩間島は、石垣島から1時間弱で行くことができるが、時化で冬期は1週間欠航することが珍しくなく、日常生活に大きな支障が生じている。堀本（2014）は、2010年の調査で西表島との架橋について自由な来訪による生活環境の悪化などにより、島民の3分の2が橋を不要と考えていることを明らかにした。しかし、その後の5年間に起こった約1カ月におよぶ船の欠航や、島内唯一の売店の閉店により架橋を必要とする島民の増加が推察された。本研究の目的は、2010～2015年の5年間に生じた利便性の低下により、架橋に対する島民意識に変化が生じていることが予想され、再調査によってそれを明らかにすることである。その結果、2010年は約67%、2015年は約63%の回答者が環境の悪化や宿泊客が減少する懸念、島であることが魅力で橋は不要と考え、利便性が低下しても架橋を不要とする者が多いことが明らかになった。

キーワード：架橋、観光地化、島民意識、鳩間島、西表島

I 問題の所在と研究目的

島への往来は海路を余儀なくされ、陸路に比べ移動に制約を伴うことが多い。それを少しでも緩和するために、様々な改善がなされてきた。本稿で取り挙げる鳩間島においても、高速船や大型船の導入による移動時間の短縮、港湾の整備、防波堤の建設、潮の満ち引きに関わらず船の乗り降りが容易となる浮棧橋の建設、港の待合所の整備などにより、利便性や快適性が著しく改善された。それでも、台風や時化による欠航のため島外へ移動ができなくなることがある。

本稿で取り挙げる鳩間島は、現在売店1軒さえなく、船の欠航時には生活物資の取り寄せができなくなり、日常生活に大きな支障をきたしている。さらに、急患発生時などにはヘリコプターの要請が必要となり、病院へ搬送されるまでに時間を要する。そこで、陸続きでないが故に生じる不便さの解決策として架橋が挙げられる。架橋について、既に多くの研究が行われており、そのほと

んどにおいて、メリットと同時にデメリットが生じることが指摘されている。

架橋を肯定的に取り挙げた主な研究として、次のものがある。堀本（2015）は、沖縄県野甫島民の伊是名島への架橋について、地域の発展・活性化、利便性の向上、伊平屋村と伊是名村の合併につながる、経済効果がよくなるなどの理由により約75%の人が架橋に賛成していると述べている。また、堀本（2013a）は、沖縄県慶留間島民の阿嘉島との架橋について、日常生活に必要な公的施設や売店が阿嘉島のみであり、利便性の向上から約96%の人が橋を必要としていると指摘している。さらに、堀本（2012）は、沖縄県野甫島民の伊平屋島との架橋について、車で橋を渡り伊平屋島へ行くことが既に生活の中に組み込まれており、58人全ての回答者が橋を必要としていると述べている。一方、塩谷（2000）は、広島県の田島・横島を取り挙げ、本土への通勤者数が増え、生活空間は大きく拡大したと指摘している。さらに、村上（2000）は、瀬戸内海に位置する伯方島